

〔報告〕

看護実践の評価を目的とした大学との共同研究が精神科看護職に及ぼす影響

池 邊 敏 子 グレグ美鈴 高 橋 香 織

Influences on Psychiatric Nurses from Collaborative Research with the College for the Purpose of Evaluating Nursing Practice

Toshiko Ikebe, Misuzu F. Gregg, and Kaori Takahashi

I. はじめに

看護は実践の科学であるといわれている。看護学の研究には、実践の場の諸問題の解決のための技術の開発を行うと共に、その結果を看護学の大系へと結びつけていくことが求められている。そのため、実践現場との共同研究が重要となっていく。

一方、実践現場の看護専門職は、国民の保健医療福祉へのニーズの多様化、関連領域との連携、科学技術の発達などから専門性の維持・発達に向けての生涯学習を求められている。

看護系大学の教員は、看護実践者の看護の質的向上による保健医療福祉サービスの向上と、看護学の学問的体系の構築を目指して、看護実践の場との共同研究が求められている。看護実践の場との共同研究は、実践の場が抱える今日の課題の教育への反映をも可能にすることに加え、学生の卒後教育環境の整備ともなる。看護実践の場との共同研究の円滑化への提言も行われるようになってきている¹⁻⁵⁾。共同研究をすることで、研究目的に対する成果に加え、参加した教員側の学びを記載しているものもあった⁶⁾。

共同研究が教員や実践現場の看護職に与える影響は、研究目的の達成に加え、参加者個々の達成内容をも含むと考える。この参加者個々の達成内容は、新たな研究への課題発見、研究と実践の循環過程、各自の実践能力・職場の看護の質の向上などに反映すると考える。

そこで、本研究では、共同研究が及ぼす影響を精神科看護職との記録分析の共同研究⁷⁾に参加した看護職の共

同研究への期待・達成内容を基に明らかにする。

(岐阜県立看護大学は、開学当初から大学と看護実践の場との組織的提携に基づいた共同研究を行っている。今回は、実践現場からの依頼と共同研究申し込みの時期的なズレで組織的な提携はできなかった。)

II. 研究方法

1. 研究対象

表1 対象の特性

	A	B	C
年 齢	27	29	30
性 別	男性	男性	男性
精神科病棟での 看護師としての経験	2年目	2年目	3年目
精神科病棟での 勤務経験	5年	1年	7年

岐阜県下のA精神科病院の看護婦・士6名は、実践現場の看護の質的向上をはかりたいという動機から、実践現場の課題を明らかにする目的で、本学教員と現状の看護実践分析を開始した。看護実践の分析にあたり、自らの看護実践内容の評価目的で1事例の記録分析を本学教員と行った。本研究の対象は、この記録分析に継続的に参加した3名の看護師である。

対象となった3名(表1)の年齢は、20歳代後半が2名と30歳代が1名であった。精神科病棟で看護師としての資格修得後の経験年数は、3人とも3年未満であった。精神科病棟での勤務経験年数と看護師としての経験年数の差は、准看護師もしくは、看護補助者としての勤務年

数である。

2. 面接期間

平成13年7月10日～7月16日である。

3. 方法

1事例の記録分析は、平成12年9月～平成13年6月までの間、1回／月～4回／月といった勤務事情を考慮して不定期に行った。分析が終了した7月に、共同研究に全く関与していない本学教員による半構造化面接を行い、面接内容は、対象者の了解を得てテープに録音し、逐語録を作成した。平均面接所要時間は約40分であった。

面接、プライバシーの守れる環境で、個別に行った。面接内容は、自分や職場の看護実践に対する考え・感じ、共同研究への期待、今後の課題であり、対象がどのように考え・感じたかを大切にした。

分析方法は、質的・記述的分析方法を用いた。逐語録は、繰り返し読み、記述されている場面・語彙の意味を変えないように要約し、1データとした。1データに要約された内容のうち類似するものをまとめてサブカテゴリとし、さらにカテゴリへと抽象化していった。カテゴリ化にあたっては、研究者間で合意が得られるまで検討を加えた。

4. 倫理的配慮

研究への参加と同意は、研究目的、研究参加に伴う利益・不利益、秘密性などを口頭と文書をもって確認した。

5. 分析結果の厳密さの検討

分析結果は、対象者に返し、各対象者から達成内容を表現していると認められた。

Ⅲ. 結果

データを分析した結果、共同研究への期待と達成内容から15のサブカテゴリと5つのカテゴリが抽出された(表2)。

結果では、各カテゴリとサブカテゴリを述べると共に、カテゴリ・サブカテゴリの命名の真实性を記するために、プライバシー保護を念頭に面接内容を述べる。

1. カテゴリ1 【共同研究への内発的動機】

【共同研究への内発的動機】は、4つのサブカテゴリから構成されている。サブカテゴリには、《自分が目指す看護をしたい》《自分の看護実践の限界とジレンマ》

表2 共同研究を通しての達成内容

カテゴリ	サブカテゴリ
共同研究への内発的動機	自分が目指す看護をしたい
	自分の看護実践の限界とジレンマ
	自己学習の試みの中断
	同僚の看護実践の根拠を解りたい
共同研究からの学びと実践への試み	大学教員からの刺激による学び
	看護の見方・考え方の変化
	研究には限界や困難があることの学び
	実践の中で学びを活かす試み
共同研究で得たことを実践する中で の学び	研究と実践が一体であることへの気づき
	同僚の看護の意味・悩みへの気づき
	自分の看護への客観視
学びと実践の連鎖 の肯定的評価	看護の共有化が図れた喜び
	共に向上したい気持ち
新たな課題と支援 を求めて	新たな課題達成への意欲
	支援を得ながら学びたい

《自己学習の試みの中断》《同僚の看護実践の根拠を解りたい》が含まれている。

《自分が目指す看護をしたい》には、「・・・看護に一貫性がない、各自が経験に基づいて看護しているので、統一がない」「患者からの陰性感情をうとうしいよね」ということで共有化されてしまう・・・」「失敗しても社会に出たいという人がいる。看護者としてこう何とかしてあげたい・・・」などのように、現状の看護から前進したい、患者の声に応えたいという内容が含まれている。

《自分の看護実践の限界とジレンマ》には、「やっぱり、このままでいいのだろうか・・・」「自分一人では、その何がよくて何が悪いのか、自分の看護がよくわからない」「長期在院患者のいつ退院してもいいような、・・・家族の受け入れが悪く、一方病棟の中で穏やかに過ごしている患者、あえてそれを崩して社会復帰させるのもどうかという思い、じゃあ看護者として何やっているんだろう」「退院してもすぐくしゃくしゃになって戻ってくる患者も多く、何やってるんだろう・・・」「病院に住所を移している人がいて、だから動かしようがないとか・・・」などのように、自分の看護実践への不確実さや患者を取り巻く諸問題と自己の実践能力との乖離などが含まれている。

《自己学習の試みの中断》には、「多少顔を知っている人を集めて勉強会をやった」「最初のうちはよかったんですが、だんだん人が減って・・・」「半年ぐらいで終わって」というように、自発的な勉強会を行ったが、中

断してしまったという内容が含まれている。

《同僚の看護実践の根拠を解りたい》には、「最初に感じたのは、経験主義というか・・・言葉じゃわからないんだよという・・・」「やってみないと解らない、これも経験だよと言うことをよく聞いて、ちょっと解せないという感じ・・・」「経験のある人の看護をみている中で、まあこれがほんとにいいのかなという疑問・・・」というように、先輩の看護実践の根拠を共有化できないことで生じている疑問が含まれている。

2. カテゴリー2 【共同研究からの学びと実践への試み】

【共同研究からの学びと実践への試み】は、4つのサブカテゴリーから構成されている。サブカテゴリーには、《大学教員からの刺激による学び》《看護の見方・考え方の変化》《研究には限界や困難があることの学び》《実践の中で学びを活かす試み》が含まれる。

《大学教員からの刺激による学び》には、「メンバー3～4人で一つの答えが出たときに、それから先生が一言言ってくれる、その一言が大きな意味があって・・・」「当たり前のように疑問に思わなかったことが、第三者がいたことで気づく」「単純作業的なことから発見があるというか、気づきを与えてくれたということ・・・」というように、共同研究を行うことで外部からの刺激が学びとなったことが含まれる。

《看護の見方・考え方の変化》には、「記録内容に視野が広がったというか、理論的な点も含まれてきた」「毎回毎回気づきがあった」「だんだん疑問も感じるし、疑問を感じていない自分があったと思うし・・・」というように、自分の看護に対する見方が変わってきたという内容が含まれる。

《研究には限界や困難があることの学び》には、「今回の研究では経験のある人の直感力みたいなものは、まだまだ分析しきれていない」「自分の理論的裏付けまでは達していない」「時には悔しいこともあったがそれは当然と思う」といった研究目的からの限界や研究プロセスで感じた思いが含まれる。

《実践の中で学びを活かす試み》には、「記録のための記録ではなく、自分の看護がどのように記録に反映されているかをまず考えるようになった」「陰性症状で自閉的な人なんか、書く文章が決まっちゃうんですが、平穩

に過ごすとか、今は、本人の希望とか関心とかすごく厳密にフォーカスして関わって、けっこう具体的に書くようになった」「・・・看護者が変わらないと何も変わらないという思いがあって、PSWと連絡をとったり、凄く自分の行動がアグレッシブな感じになってきたと思います」というように、自分の看護実践が共有できるように心がけたり、看護実践に変化を試みている内容が含まれる。

3. カテゴリー3 【共同研究で得たことを実践する中での学び】

【共同研究で得たことを実践する中での学び】は、3つのサブカテゴリーから構成されている。サブカテゴリーには、《研究と実践が一体であることへの気づき》《同僚の看護の意味・悩みへの気づき》《自分の看護への客観視》が含まれる。

《研究と実践が一体であることへの気づき》には、「こちらの大学で学んだことが反映されはじめています」「研究に参加した者の意識が変わって、記録にも反映するようになって、他の看護者の記録も変わってきていました・・・」というように、研究で学んだことを実践するという研究と実践が遊離していないという内容が含まれる。

《同僚の看護の意味・悩みへの気づき》には、「長い関わりの中でその人にとってはいいという、その人が判断して行動をとっているのかなと考えられるようになった」「・・・入退院を繰り返す患者に今までだったら病院でお世話になって日々平穩に過ごせばいいのかなという思いがあって、やっぱり社会に出たいという患者がいて、将来短いかもしれないけど社会で過ごしたいという思いをきいて、今までの看護者の自己欺瞞に過ぎないのかと思って、カンファレンスで言ってみたら、みんな悩んでいたことは同じだった」というように、他者の看護実践には、それなりの意味があることを認められることや、皆同じ悩みを持っていたことへの気づきの内容が含まれる。

《自分の看護への客観視》には、「記録の書き方自体変わったと思うんです。ある意味目的を持った関わりをしているので・・・」「研究に参加した人の合意の中では、自分も入りますが未熟であったということはありません・・・」というように自分の看護実践を評価する内容を

含む。

4. カテゴリー4 【学びと実践の連鎖の肯定的評価】

【学びと実践の連鎖の肯定的評価】は、2つのサブカテゴリーから構成されている。サブカテゴリーには、《看護の共有化が図れた喜び》《共に向上したい気持ち》が含まれる。《看護の共有化が図れた喜び》には、「自分たちの変化は、多少なりとも影響を与えているとは思います」「カンファレンスなどで発言すると反響があるというか、感じるようになった」「いつも寝てばかりいる患者さんに、いつもどうして寝てばかりいるかという関心を持って問を発したりする関わりと、まあそういった記録内容が残っていくわけだから、それを見た他の看護職も多少影響を受けていると思うんです」というように、自分の看護実践の変化が受け入れられ共有化が図れているという内容が含まれる。

《共に向上したい気持ち》には、「研究は個人のレベルアップでやっていることで、職場のレベルアップができればいい」「大きな展開ができていない」「自分がレベルアップすれば職場の看護力も上昇する」というように、看護実践の向上を共に図りたいという内容が含まれる。

5. カテゴリー5 【新たな課題と支援を求めて】

【新たな課題と支援を求めて】は、2つのサブカテゴリーから構成されている。サブカテゴリーには、《新たな課題達成への意欲》《支援を得ながら学びたい》が含まれる。

《新たな課題達成への意欲》には、「過去の事例を洗い直してみたい」「今、本当に基本的基礎知識をつけたいな」といった今後のキャリア発達に向けた課題に関する内容が含まれる。

《支援を得ながら学びたい》には、「皆の合意が得られるまでは前に進まない窮屈さはあったが、皆でやることで自分に足りないものが見えてきたので皆でまたやりたい」「大学主体で自分たちも参加できる研究があったらどんどん参加したい」「大学での講義が聞きたい」といった周囲の支援を求める内容が含まれる。

IV. 考察

1. 実践現場の看護職の内発的な動機を達成する場としての共同研究

共同研究への動機には、《自分が目指す看護がしたい》

《自分の看護実践の限界とジレンマ》《同僚の看護実践の根拠を解りたい》の3つのサブカテゴリーが含まれていた。

精神科看護職として患者の健康問題に、チームとして一貫した継続的な関わりを行い、看護の専門性を追求していきたいという動機と、患者の現状を「何とかしたい」という意欲がある。しかし、患者の攻撃的な陰性感情は、ややもすると看護職を不安に陥らせる。この様なときに、患者との心理的な距離をとって自我を防衛してしまうこともある。また、再発・再入院の繰り返しは、看護者に無力感や限界を感じさせる。さらに、長期在院患者の社会復帰への支援は、他職種との連携のなかで成立するものであり、看護職のみで解決していくには限界がある。対象者は、看護職として現状の看護実践への疑問を感じ、限界と直面するなかでも「何とかしたい」という思いは強く、方策の見えない中で閉塞感を感じていたとも考えられる。

一方、精神科看護のなかで、「経験を積んだらわかる」という言葉はよく耳にする。言葉ではなかなか表現できにくい「感」や「コツ」というものをベテランの看護職は感じ、持っている。看護職として共有化できないことへの限界は、「経験のない側」の疑問へと発展している。しかし、疑問のみに留め置かず、前進しようと勉強会を試みたが中断をしてしまった。

このように、看護実践現場での閉塞感と、それを打開しようとした試みである勉強会の中断は、対象者の「意欲」が浮遊した状態を呈していった。対象者は、目指す看護をしたい、向上したい、解りたい、という内発的な高い動機づけを大学との共同研究という場の存在があることで実現化がはかれるという期待があったと考えられる。

2. 共同研究での学びを実践へと発展する力の醸成

共同研究への期待は、現状の看護実践を「何とかしたい」ということであり、このことは、本学の共同研究の目的と一致するものである。実践のなかで自分たちの看護を検討できる研究素材として、看護記録を用いた。分析は、質的・記述的分析であったが、参加者の合意が得られるまで、検討を加えていった。殊に、対象者は、研究素材である記録を記載した当事者でもあり、記載時の状況や自分がどのような思い・感じで記録をしたかを思

い起こせる立場にある。つまり、自分たちが書いた記録の分析は、自分の看護実践そのものが評価されるということでの興味関心を持つ研究素材である一方、自分の限界性に直面するかもしれないという専門職としての自己概念に脅威を感じるものでもある。共同研究を行う場合の教員は、このような脅威を最小限に留める働きかけを意識的に行うことが必要と考える。

対象者は、取り分け精神症状に変化のない患者への「平穩に過ごす」といった記録が、当事者の立場に沿っていないことや、第三者の視点からすると、自分たちが当たり前と思っていたことがそうではないということに気づくなど、共同研究のなかで、新たな発見や学びを多く体験している。さらに、この新たな発見・学びを、実践での検証へと発展させている。このように、研究での発見や学びが実践現場の改革に結びつくことこそ、共同研究の意味がある。今回、共同研究を通しての発見や学びが実践に円滑に活かされていった背景は、対象者個々の意欲もあるが、同一職場・9ヶ月に渡る共同研究を共にやってきたという経験の場の共有が、相互のコミュニケーションに効果を及ぼし、実践への移行を円滑に行ったと考えられる。さらに、共同研究に対する上司の参加・承認は、大きく影響したとも考えられる。

3. 実践の中での自己変革

【共同研究で得たことを実践する中での学び】のサブカテゴリーには、《研究と実践が一体であることへの気づき》《同僚の看護の意味・悩みへの気づき》《自分の看護への客観視》が抽出された。

《研究と実践が一体であることへの気づき》は、カテゴリー4の【学びと実践の連鎖の肯定的評価】にもあるように、研究をしていく中で、新たな発見や学びを実践していくことが、他の看護職の看護実践に影響しているという実感から、研究は実践と遊離していないという学びに繋がっていると考えられる。

入退院を繰り返す患者に対して、従来は「病院でお世話になって平穩に過ごせればよい」と自分を納得させていたが、「社会に出たい」患者の気持ちを重視すれば、看護職として何ができるのかという自己の課題と対峙し、悩んでしまう。このありのままの気持ちをカンファレンスで述べてみると、他の看護職も同じ悩みを持っており、悩んでいたのは自分だけではないことが発見され

たように、看護職としての悩みを自己開示することで、同僚の自己開示の返報性を得ている。このような、相互性の深まりは、親密さを形成する⁸⁾。そのため、同僚の看護の意味を理解しようとする働きへと繋がっていくと考える。

共同研究での発見や学びを実践すること自体が、自己の看護実践の意図的な変容である。

4. 内発的動機の更なる高まり

共同研究での発見や学びを実践する中で、自らの実践が周囲へ影響を及ぼしているという実感、つまり、学習による内発的な統制感は「やりがい」に繋がる⁹⁾。さらに、対象者の共同研究への参加は、内発的動機づけによるものであり、報酬を得たい・地位を得たいという外発的動機づけではなかった。同僚との相互性の深まりや、やりがいは、おもしろさや、楽しさを引き出し、《看護の共有化が図れた喜び》《共に向上したい気持ち》《新たな課題達成への意欲》という内発的な動機づけを更に高めている。

対象者の高い動機は、仲間や大学との連携の中で新たな学びを達成していきたいと考えている。1研究を通して研究と実践の相互作用を学び、さらに新たなテーマでの共同研究の繰り返しが、実践現場の変革であり、学生の教育環境の整備へと繋がる。

V. まとめ

共同研究が実践現場の看護職に及ぼす影響を共同研究参加者の期待・達成内容から明らかにする目的で、1事例の看護記録分析に関わった看護職3名を対象に、半構造化面接による面接内容の質的・記述的分析を行った。その結果、15の期待・達成内容のサブカテゴリーから【共同研究への内発的動機】【共同研究からの学びと実践への試み】【共同研究で得たことを実践する中での学び】【学びと実践の連鎖の肯定的評価】【新たな課題と支援を求めて】の5つの期待・達成内容が抽出された。

1. 《自分が目指す看護をしたい》《自分の看護実践の限界とジレンマ》《自己学習の試みの中断》《同僚の看護実践の根拠を解りたい》から、共同研究に対して内発的な動機のあることが判明した。

2. 《大学教員からの刺激による学び》《看護の見方・考え方の変化》《研究には限界や困難があることの学び》

《実践の中で学びを活かす試み》から、共同研究をする中での学びを実践現場で試みていたことが明らかになった。

3. 《研究と実践が一体であることへの気づき》《同僚の看護の意味・悩みへの気づき》《自分の看護への客観視》から、共同研究の中での学びを実践する中で、更に新たな学びをしていた。

4. 3での学びに対して《看護の共有化が図れた喜び》《共に向上したい気持ち》という肯定的な評価をしていることが明らかになった。

5. 今後については、《新たな課題達成への意欲》《支援を得ながら学びたい》という支援を求めながらも新たな課題追求の姿勢がうかがえた。

つまり、共同研究が実践現場の看護職へ及ぼした影響は、共同研究の目的以外に、参加した各自の内発的な動機を、研究プロセスの中での学びを通して実践化し、看護実践現場の実践内容に反映していることに加え、研究と実践の循環過程に影響したと考えられる。このことは、共同研究が実践現場の質的向上に寄与するという本来の目的を達成できたことが明らかになったと言える。

本研究は、1 精神科病院で勤務する経験3年未満の看護師3名を対象に認識面を分析している。従って、対象者の行動変容が具体的にどのように起こったかまでには至っていない。

謝辞

本研究に快く承諾をして下さった看護師の方々に深謝致します。

文献

- 1) 陣田泰子：私の看護研究へのとりくみ 臨床看護実践にこだわって、看護教育39（1）；976-979, 1998.
- 2) 石原美和：臨床と教育機関との共同研究の意義、看護教育39（11）；975, 1998.
- 3) 祖父江育子：教員と臨床スタッフによる参画型共同研究の推進、看護展望23（11）；33-35, 1998.
- 4) 前田ひとみ：HIV／エイズ研究のプロセス さまざまなフィールドの研究仲間を得て、看護教育39（11）：966-969, 1998.
- 5) 川島みどり：臨床と教育の共同研究の進め方、看護展望26（2）；30-33, 2000.

6) 前掲1).

7) 村岡大志, 小野悟, 星太輔他：急性期病棟における短期入院患者の看護活動内容、日本精神科看護学会抄録集4；41, 2001.

8) 多鹿秀継, 竹内謙彰, 池上知子他著：人間行動の心理学, 147, 福村出版, 1999.

9) 市川伸一著：学習と教育の心理学, 現代心理学入門3, 28, 岩波書店, 1999.

(受稿日 平成14年2月26日)